

### 13 高気圧酸素治療の現状と問題点

～12年間の治療経験をふまえて～

稲垣伸洋<sup>1)</sup> 花房茂樹<sup>1)</sup> 寺田尚弘<sup>1)</sup> 並木みずほ<sup>1)</sup>  
中田託郎<sup>1)</sup> 小林博之<sup>2)</sup> 佐々木健<sup>2)</sup> 平田雅弥<sup>2)</sup>  
村谷信太郎<sup>2)</sup> 鈴木 忠<sup>1)</sup>

( 1) 東京女子医科大学 救急医学  
2) 同 救命救急センター

【はじめに】当センターでは1994年より12年間で1061例の高気圧酸素治療（以下HBO）を施行してきた。疾患別の推移や延べ人数の変化について調査し、HBOの現状と問題点について検討を行った。

【対象と方法】SECHRIST社製MODEL2800J（第1種）を使用し、2気圧の純酸素加压で施行している。1994年7月より2006年6月までの12年間にHBOを施行した1061例（男646例，女415例），平均年齢52歳（1～91歳）を対象とし、2000年6月までの6年間を前期、2000年7月以降の6年間を後期として検討を行った。

【結果】前期の施行回数は556例，3615回で救急的適応が394例，1914回（53%）で非救急的適応が162例，1701回（47%）であった。後期は505例，3318回のうち救急的適応が345例，1776回（53.5%）で非救急的適応が160例，1542回（46.5%）であった。救急的適応疾患の内訳は，前期vs.後期で急性脊髄障害105例（26.6%）vs.54例（15.7%），脳梗塞・開頭術などによる意識障害・脳浮腫101例（25.6%）vs.82例（23.8%），腸閉塞75例（19%）vs.109例（31.6%）であり，後期には一酸化炭素中毒やショックの症例はなかった。突発性難聴は救急・非救急をあわせると前期は7例（1.3%），後期は112例（22.2%）と増加していた。人工呼吸器併用症例は救急・非救急をあわせると前期は38例（6.8%），後期は13例（2.6%）と減少しており，2002年以降にはなかった。

【考察】HBOに対する救急的適応疾患のニーズは高いが，重症患者の第1種装置での治療は減少傾向にあった。安全管理面を考慮した近年の現状では，第1種装置での重症患者の治療には限界があり，重症患者に対応できる新たな治療装置の開発が急務であると考えられた。

### 14 CTガイド下経皮的肺針生検による空気塞栓に対して高圧酸素療法が奏効した1例

清水公裕<sup>1)</sup> 中野哲宏<sup>1)</sup> 懸川誠一<sup>1)</sup>  
大谷嘉己<sup>1)</sup> 斎藤 繁<sup>2)</sup>

( 1) 群馬大学大学院 臓器病態外科  
2) 同 麻酔神経学

症例は69歳，女性。検診の胸部X線で右上肺野に異常陰影を指摘された。胸部CTで，右S1+2に径10mm大の小結節を認め，CTガイド下経皮的肺針生検を施行した。穿刺直後に意識消失，ショック状態に陥ったため，蘇生処置を行いながら頭部CTを施行したところ中大脳動脈領域に空気泡を複数認めた。空気塞栓症と診断し，高圧酸素治療を開始したところ，脳血管内の気泡は著明に減少し，意識レベルの改善も見られた。以後連日6日間高圧酸素治療を施行した。当初認められた左半身の麻痺は，徐々に改善し，発症後7日目の時点で左手指に軽度の運動障害を残すのみとなった。CTガイド下経皮的肺生検による合併症で空気塞栓症の頻度は極めて低いが，重篤であり，速やかな診断と適切な治療を要する。今回，CTガイド下経皮的肺針生検による脳空気塞栓に対し，高圧酸素療法が著効したと思われる症例を経験したので報告する。